

きてみてくなんしよ。



城下町 ^{しも} ^て ^ど 下手渡

きてみてくなんしょ。 城下町下手渡

～目次～

伊達市の南口玄関 P 4
県都「福島」から車で30分

下手渡藩の名残をとどめる P 5
遺物の数々は地元の宝物

今も残る地域の人々が守り
紡いできたもの P10

祭りは地域に貢献！ P14
地域文化や伝統を伝える
地域の結束を高める

思い出の下手渡小学校 P16
県内で開校3番目・独立校舎では
トップ

未来を担う子どもたちの声 P18

きてくなんしょ花工房へ P22
伊達市の奥座敷！

新たな地域づくりでもっと
元気に～ P24

下手渡土産てくてく歩いて
おみやげ探し？ P26

表紙写真（下手渡メイン・ストリート）

下手渡地域の中心集落地。江戸時代の末期、城下町（陣屋町）として栄えた。地域の中心地にあるバス停留所は城下町と名付けられ、今もその名を留めている。



つきだて花工房には、色とりどりの様々な花が咲いている。

④「ポピー」見頃は5月下旬

⑥「ヤマユリ」見頃は7月中旬

⑦「コスモス」見頃は9月中旬から

発刊の言葉

多くの皆さん訪れること期待



下手渡自治会長
南 忠 雄

地域づくり事業の最終年度になる平成24年度に、推されて自治会長になり、どうかその責任を果たすことができました。皆さんのご協力に感謝申し上げます。

実施事業の一つであります下手渡藩資料展示会は、地域内外から多数の来場者を迎え、主催者一同大喜びをしました。家宝としていた昔々の品々を訪問された家では、快く貸してくれました。将来このような資料を常時展示できたらの夢を持っています。九州三池藩では郷土館という建物を造り展示しています。

下手渡PR冊子が担当部会の努力で発刊することができました。更に下手渡地域が理解され、多くの皆さんがこの地を訪れることに期待しています。

終わりに地域づくり事業にご協力いただきました関係機関の皆さんに心より感謝申し上げます。

発刊に寄せて

ふるさとの再発見にも活用



前下手渡自治会長
小 林 洋 志

下手渡PR冊子が発刊の運びとなりましたことを心からお喜び申し上げます。

振り返りますと、自治会長の任にあった平成20年、福島県地域づくり総合支援事業（県補助事業）の受け入れを地域の皆さんから承認を得たものの、その責任の重さを強く感じたことが昨日のことにように思い出されます。

翌年、地域づくり協議会を組織し、本事業の認可期間である3カ年間の計画書を策定。この計画には、地域の象徴である下手渡藩陣屋跡を始め、地域資源の活用を取り入れ、この地を訪れる皆さんとの交流が盛んになることが込められています。

最終年度を迎え、計画された全ての事業が終了できますことは、関係者並びに地域の皆さんのご尽力とご協力の賜物です。心から敬意と感謝を申し上げます。

終わりに、この冊子がふるさとの再発見や地域の将来を探る手がかりとして、多くの皆さんに親しまれ、活用されることを願うものです。

伊達市の南口玄関

県都「福島」から車で30分

伊達市月舘町下手渡地域は伊達市の南部に位置し、伊達郡川俣町と隣接している。地域の中心部を国道349号線が南北に走っている。

地域全体の面積は273ヘクタール。平成25年1月1日現在、90世帯、282人がこの地に住んでいる。ほとんどの世帯では、田畑を所有しており、米や野菜づくりを行っている。どこにでも見られる農家の暮らしが、ここ下手渡地域でも続いている。

でも他と違うところがある。幕末、この地に陣屋があったこと。今も、下手渡藩陣屋跡や下手渡藩の菩提寺である耕雲寺の侍墓地など大変貴重な文化財が残されている。



さやえんどう



あんぽ柿



きゅうり



下手渡藩の名残をとどめる

遺物の数々は地元の宝物

**藩政時代からの贈物
心の拠り所となる！**

江戸末期、伊達市月舘町下手渡に下手渡藩の拠点である陣屋が置かれていた。1806年（文化3年）、立花氏が九州三池、現在の福岡県大牟田市から10カ村1万石の領主として移封され、以来63年間、この地に陣屋を開き伊達地方南部を治めた。

今でも、殿様が住んでいたところ、ご城下があったところとして、地域住民は、地元への誇りと愛着心を持っており、心の拠り所となり続けている。藩政時代からの数々の遺物は、地元の宝物で、地域のシンボルの存在である。

●写真 下手渡藩陣屋跡 陣屋跡の一角には、殿様を偲んで懐古の碑が建てられており、「下手渡の殿様と陣屋の物語」を静かに伝えている。



所在地／伊達市月舘町
下手渡字天平

アクセス

東北自動車道福島西IC
から車で約40分
福島駅から福島交通バス
で約50分、城下町又は下
手渡停留所下車。停留所
から徒歩約10分

130年余を経て 姿を現した陣屋の石垣

下手渡藩陣屋の石垣が残っていた。長い間、草木や土に覆われ、その存在は忘れられていた。平成15年2月、陣屋跡の調査で、130年余の時を経て三段の石垣、枡形などが姿を現した。

(陣屋とは)江戸時代、「無城主」とされた1、2万石の大名は城を構えることを禁じられた。城を持たない大名の政庁や居館を陣屋と称した。



畑地から姿を現した陣屋の石垣
(福島民報社写真提供)

陣屋跡に懐古碑を立て 往時を偲んでいる。

戊辰戦争の時、仙台藩兵によって、陣屋が襲撃され、陣屋下、町屋敷ともども焼き払われた。現在、陣屋跡は宅地と畑になっている。

明治35年に旧藩士が中心となって、立花家の系譜、下手渡への移封、天保の飢饉とその対策などを記した懐古碑が立てられた。今も往時を偲ぶことができる。



旧藩士によって陣屋跡に立てられた「懐古碑」
(福島民報社写真提供)

藩主の飲料水として使用されたと伝わる井戸
「御前井戸」(福島民報社写真提供)



殿様の飲料水「御前井戸」 今も住民の生活を 潤している。

下手渡藩陣屋内部には、井戸も数多く掘られ、12基ほどあったようである。このうち、御前井戸は、藩主の飲料水として使用されたと伝わる。これまで御前井戸は、枯れたことがなく、今も住民の生活を潤している。

陣屋の太鼓櫓 物見台としても使われた。



戊辰戦争で焼け落ちたとされる下手渡藩陣屋の太鼓櫓の跡。
専門家から説明を受ける見学者

下手渡藩陣屋にも太鼓櫓たいこぐらが設置されていた。太鼓櫓は、時を知らせたり戦いの合図を打ち鳴らしたりするための太鼓が置かれた。

街道と町を眼下に眺望できる陣屋北西側に設置され、物見台としても使われた。戊辰戦争で焼け落ち、現在は、太鼓櫓の基壇石垣が残っている。

下手渡藩の菩提寺 「耕雲寺」にも遺物

藩主に正対する藩士墓碑
死後も忠誠を尽くす。

下手渡藩の菩提寺「耕雲寺」の境内に侍墓地がある。三池藩主立花種周侯、下手渡藩主立花種善、種温侯の墓石と最後の殿様「種恭侯」の墓碑があり、藩主のお墓に向かい合って一段低いところに藩士たちのお墓が並んでいる。



耕雲寺侍墓地。藩士お墓より一段高いところにある藩主墓碑

寺宝の一つ大位牌
戦死者を慰霊顕彰
九州三池から運ば
れたもの。



下手渡藩立花家の一族にあたる九州柳川藩立花家17代の立花宗鑑氏（中央）が墓参のため、平成18年10月28日に耕雲寺を訪れた



大位牌の全形



位牌上部には、筑前國寶満庵屋箆城戦死者之霊と書かれている

耕雲寺の寺宝の一つである大位牌は、豊臣秀吉の島津討伐にあたり、立花家の始祖・高橋紹運が筑前国岩屋城の戦で箆城し戦死した700余人の名を記し、戦死者を慰霊顕彰するためつくられたもの。九州三池から運ばれたものと言われている。

アベマキに秘められた逸話 殿様が持ち込んだもの。



アベマキの葉



厚いコルク層を持つ
樹皮。あばた状



成熟に足かけ2年を
要するドングリ

アベマキの群生

西日本にしか見られない学名アベマキ、地元ではオニクスギと言われる群生がある。これは、九州三池から新領地に移ってきた立花氏が自分の住む領地に植えたのではないかと、言われている。

当時、アベマキの樹皮は硬いため、履物の底に使われたらしい。戦後しばらくの間、コルク製品に利用された。



陣屋跡北西部にあるアベマキの大木



今も大切にしている御典医を運んだ駕籠



立花侯が使われた御膳

御典医（藩主に仕えた医師）を運んだ駕籠や藩主の御膳が今でも残っている。ゆかりの品々を大切にしている。

典医駕籠や殿様御膳
今もゆかりの品が残る。

殿様柿「たまがわ」

藩主お抱えの御典医を務めた南家、現在の南忠雄さん方に殿様柿と呼ばれた柿の木がある。品種は九州産の「玉川」。下手渡藩主・立花家の旧領三池から伝わったとされる。同じ品種が町内数軒に残る。

九州イモ飢え救う

文政年間、長崎に出張した藩士・森四郎助がジャガイモを持ち帰り、普及させたと言われている。飢えを救い、命をつないだジャガイモは「九州イモ」とも呼ばれた。